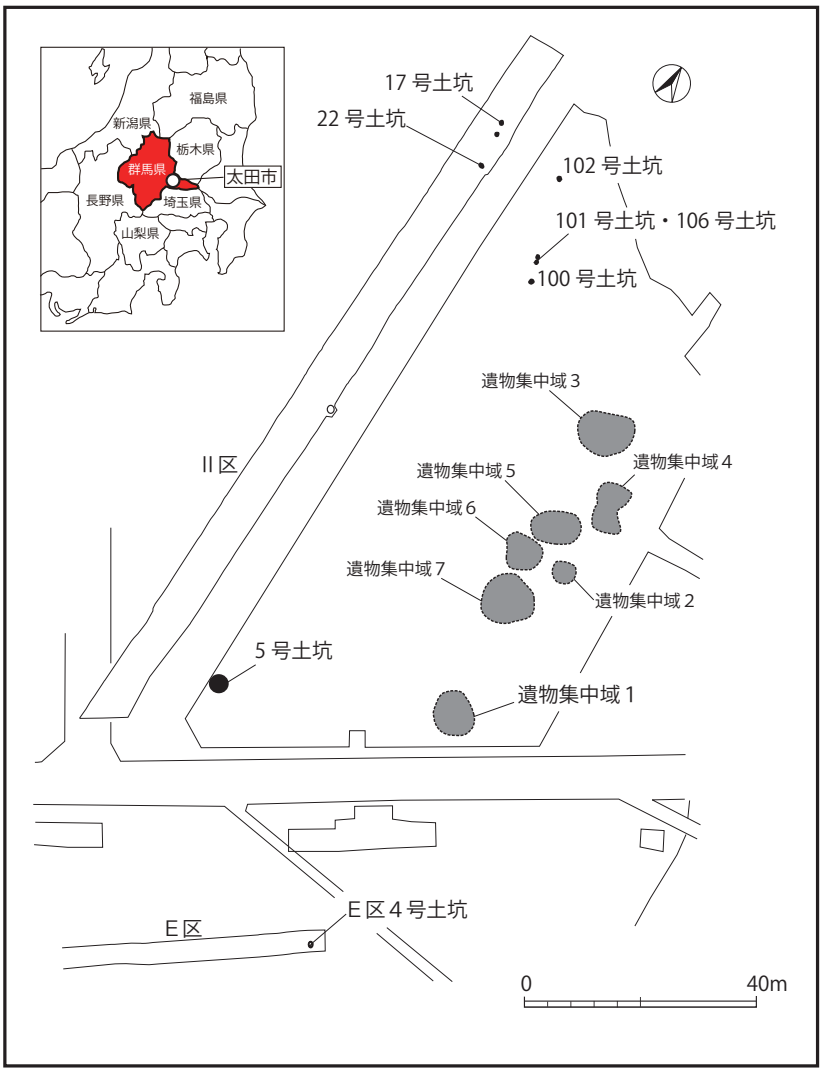
下宿遺跡

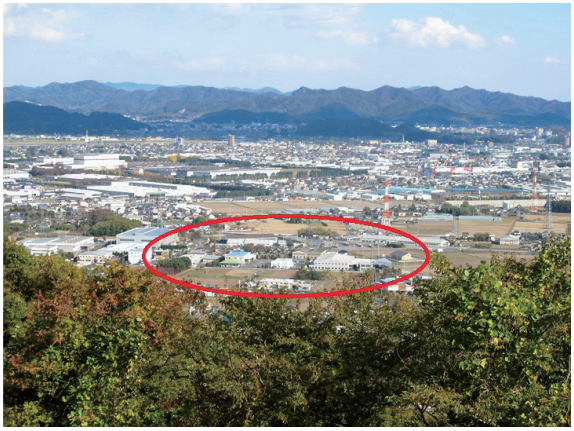
―太田市にある縄文時代草創期の遺跡―

下宿遺跡は、太田市のおよそ中心にある金山丘陵の東に位置しています。ここでは、各種開発事業（ほ場整備事業・工業団地造成事業）に伴う発掘調査が行われました。その結果、昭和59・61・62年度に実施された発掘調査において、縄文時代草創期の爪形文土器や石器群が出土いたしました。出土した爪形文土器は、完形に復元できるほど残存状況が良好な資料です。また、それらに伴う石器についても出土しており、これらは縄文時代草創期における狩猟採集民の生活を語る上で重要な資料であります。



下宿遺跡遺構全体図

（下宿遺跡の位置：太田市東金井町地内
東経 139° 23′ 37″、北緯 36° 19′ 15″付近）



金山山頂から見た下宿遺跡（西から）

縄文時代草創期

日本列島において人類の生活が始まった後期旧石器時代に続く時代で、約１万２千年前頃とされる。最終氷期が終わり気候は暖かくなり、人々は狩りや漁、木の実などの採集などで糧を得ていたとされています。旧石器時代の人々は移動生活を繰り返していたのに対し、この頃土器が出現し、住居が造られ始めたとみられることから、この時代に定住化が進んだとされています。

17号土坑

17号土坑出土爪形文土器（復元）（S=約1/3）

土器の底面

90×65㎝の楕円形の土坑。ここから出土した爪形文土器は、口縁部から体部上半は残っていなかったが、底部がほぼ完存している。復元口径約19.5㎝、復元高約21.2㎝。底部先端は乳頭状に尖る。外面には、全面に米粒状の爪形文が横に施されている。底部は放射状に施されている。

22号土坑

22号土坑出土爪形文土器（復元）（S=約1/3）

土器の底面

120×85㎝の楕円形の土坑。ここから出土した爪形文土器は、口縁部は残っていなかったが、体部以下の1/4が残っており、底部は完存している。復元口径約21㎝、復元高約25㎝。底部先端は乳頭状に尖る。外面には左下がりの爪形文が何段にもわたり横に施されている。

Ｅ区４号土坑（北から）

Ｅ区４号土坑

径60～90㎝の不整円形の土坑。確認面からの深さは17cm前後と浅かった。覆土に焼土が見られ、北側の壁面には小範囲に薄く灰が検出されたが、底面および壁面に焼けた痕跡は認められない。出土遺物は無文土器、赤色礫のほか、多数の石器（剥片含む）が出土している。

出土無文土器（復元）（S=約1/3）

出土した土器は、口縁部から体部上半分の約1/4が残っていた。復元口径約21㎝、復元高約26.3cm。外面は基本的に無文で、口縁部には両側から押さえつけたような圧痕がはっきりと残っている。なお、口縁部に補修孔が見られる。

一方、出土した石器総数は3208点（1528.923ｇ）。石材は点数・重量ともに黒曜石が半数以上を占め、チャートや黒色頁岩などが少量出土している。未製品を含む石鏃のほか、石槍の未製品、加工痕のある剥片、使用痕ある剥片、楔形石器、石核などが出土している。

Ｅ区４号土坑出土石器の一部

100号土坑（南から）

100号土坑

径90 ～ 110㎝の不整円形の土坑で、確認面での深さは最深約30㎝。底面は平坦。出土遺物は爪形文土器２個体分、石鏃２点、凹石などの礫器が確認されている。

100号土坑出土爪形文土器（復元）（S=約1/3）

口縁部から体部は全周、体部下半と底部が約1/2が残る。復元口径約24㎝、復元高約29㎝。底部先端は乳頭状に尖る。外面には全面に「ハ」の字状の爪形文が施されている。

100号土坑出土無文土器（復元）（S=約1/4）

口縁部の約3/4を残っているのみで体部以下は欠損している。復元口径約28㎝。文様は無文。口縁部には補修孔が１箇所見られる。

100号土坑出土石器（S=約1/1）（石鏃）

101号土坑・106号土坑

101・106号土坑（東から）

106号土坑出土石器（S=約1/1）
（左・中：石槍　右：石鏃）

口縁部から体部上半は1/2、底部は全周残っている。復元口径約18㎝、器高約23㎝。底部先端は乳頭状に尖る。外面には体部にざっくりとした爪形文が２箇所横に施されており、その間には縦方向のやや浅い爪形文が約１㎝間隔で施されている。なお、口縁部上位に補修孔を有する。

101号土坑は、径約80～110㎝の不整円形の土坑。一方、106号土坑は、径約80～100㎝の円形土坑。双方とも底面は平坦。

出土遺物は101号土坑では爪形文土器複数個体、礫数点が出土。一方、106号土坑では爪形文土器複数個体のほか、石槍２点、石鏃１点、礫数点が確認されている。

101号土坑と106号土坑は重複して確認されたが、新旧関係は明らかでない。

101号土坑出土爪形文土器（復元）（S=約1/3）

土器底面

102号土坑（西から）

102号土坑

径90 ～ 110㎝の不整円形の土坑で、確認面での深さは最深約30㎝。底面は平坦。出土遺物は爪形文土器２個体分、石鏃２点、凹石（くぼみいし）などの礫器が確認されている。

102号土坑出土爪形文土器（復元）（S=約1/3）

体部下半から底部上半がほぼ全周残っている。復元口径約34㎝、復元高約36㎝。底部先端部は乳頭状に尖るものと推定される。外面には体部中ほど・体部と底部との境の屈曲部（くっきょくぶ）・底部中ほどの３箇所にざっくりとした深い爪形文が横に１ないし２巡しており、これらの間に縦方向の浅い爪形文が約１㎝の間隔で施されている。

102号土坑石器（S=約1/1）
（石鏃）

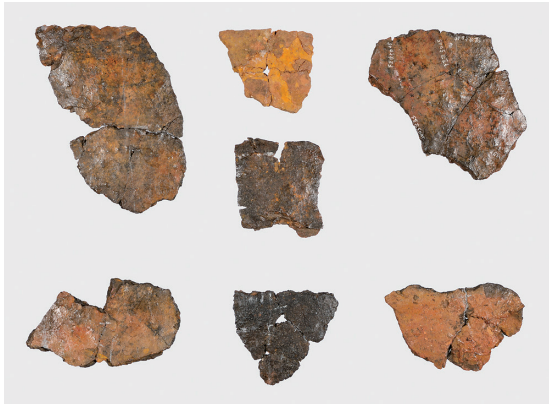
5号土坑（北から）

5号土坑

径約3.5mの不整円形を呈する土坑で、確認面までの深さは最深約50㎝。底面は緩い弧を描いている。

土坑内において焼土や炭化物等が観察されず、炉があった可能性は低い。

出土遺物は、無文土器のほか、多数の石器（剥片を含む）が確認されている。



5号土坑出土無文土器（S=約1/3）

5号土坑出土石器の一部

遺物集中域1

遺物集中域（北から）

遺物集中域1出土石器の一部

5.5×6.5mの範囲に遺物の分布が見られる。出土遺物は石鏃・石槍・円形掻器・剥片・礫器などのほか、縄文早期土器片が確認されている。

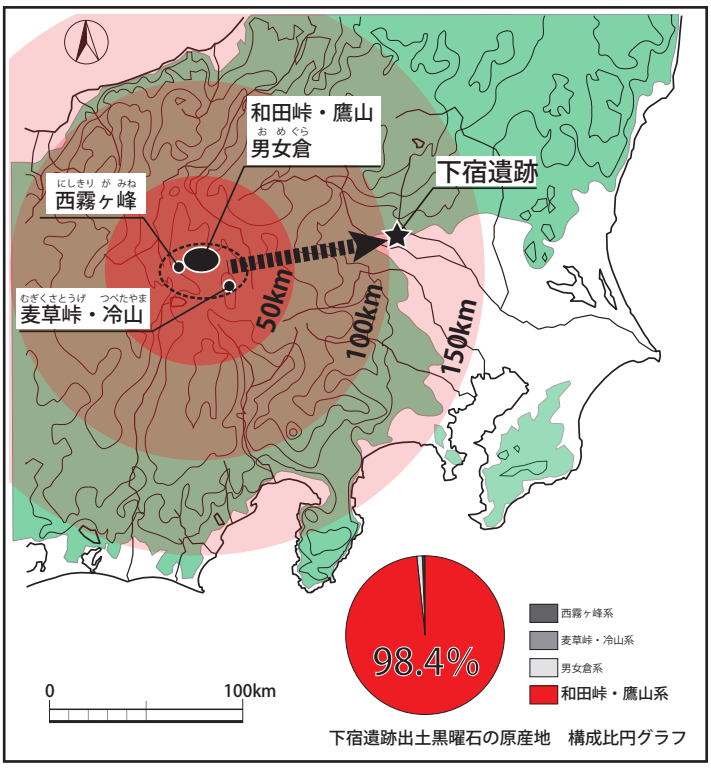
黒曜石はどこから？

下宿遺跡で出土した黒曜石について、蛍光X線分析による産地同定を行いました。その結果、577点中568点（98.4%）が和田峠・鷹山系で占めていたことや、残りの1.6%についても信州産であったことがわかりました。

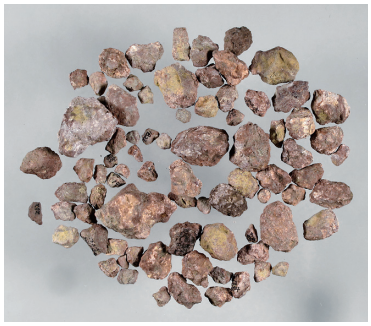
下宿遺跡で使用された石器の石材は、チャートなど遺跡近辺でも採集できるものがありますが、黒曜石などのように遠方の産地のものもあります。

これらのうち遠方に産地がある石材は、どのようにして下宿遺跡の地までもたらされたのでしょう？

直接採りに行った、あるいは、交易などによって人からひとへ伝わった、という考え方もありますが、今のところ明らかでありません。



データは明治大学古文化研究所発行の『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定―基礎データ集〈1〉―』2009の「13.下宿遺跡」から引用した。



5号土坑出土の赤色礫

5号土坑出土の円形掻器

何をしていたのか？

下宿遺跡では、縄文時代の土坑などから赤色礫が多量に見つかっています。

この赤色礫は「鉄石英」であったことが石材鑑定の結果わかりました。この鉄石英は、「ベンガラ」という古くから使われている赤色顔料の材料で、太田市近辺では採取できないため、黒曜石と同様、下宿遺跡に持ち込まれたものであるといえます。

これらの赤色礫のほかに、赤色礫の粉末が付着した磨石も見つかっています。おそらく赤色礫をすり潰したときに付いたものと考えられ、赤色礫の使用方法の一端をうかがい知ることができます。

ところで、赤色礫が多量に見つかった土坑などからは、石鏃などの狩猟具だけでなく、円形掻器などの加工具がたくさん見つかっています。円形掻器は、皮なめしの道具であるとされていることから、当時下宿遺跡にいた人々は狩猟だけでなく、皮加工も行っていた可能性があり、赤色顔料は下宿遺跡での生業に関係しているのではないかと思われます。

太田市教育委員会　文化財課
〒370-0495　太田市粕川町520尾島庁舎
電話0276-20-7090、FAX0276-52-6080
印刷　平成25年３月